

## 「立教大学でのボランティア活動～東日本大震災復興支援ボランティアの実践～」(シンポジウム採録)

### シンポジスト

根岸 えま(社会学部 4 年次生、2012 年度ポール・ラッシュ博士記念奨学金受給者)

浅見 由希乃(コミュニティ福祉学部3年次生、Three-S 学生ボランティア)

中村 みどり(ボランティアセンター ボランティアコーディネーター)

及川 賢一 氏(陸前高田市社会福祉協議会事務局長)

### コメンテーター

西田 邦昭(東日本大震災復興支援本部副本部長、副総長)

《司会》平野 方紹(ボランティアセンター長、コミュニティ福祉学部教授)

【総合司会】逸見 敏郎(ボランティアセンター副センター長、学校・社会教育講座教授)

**逸見** それでは、「立教大学でのボランティア活動～東日本大震災復興支援ボランティアの実践～」というタイトルのもとシンポジウムを始めさせていただきます。最近、「道徳」が中学校、小学校では教科になるというような動きがございます。「道徳」といいますと、心の教育ということが目標となりがちです。すると、どうしても小学校、中学校での心の教育といえますと、ボランティア活動、そしてボランティア活動イコール清掃、そういうような図式が実際に見られがちです。そういう経験を持った小学生、中学生、高校生がいずれ、大学生になります。立教大学のボランティアセンターで行っているボランティア活動の紹介というものは、清掃というだけではないわけです。そこで学生はボランティア・イメージにギャップを感じたりします。こういうようなことも踏まえて、高等教育機関においてボランティアセンターがどういう役割を果たしたらいいのか、どういう理念を持ったらいいのかということで、東日本大震災復興支援をひとつの切り口としまして、このシンポジウムを企画いたしました。

司会は、本学ボランティアセンター長の平野です。

**平野** 最初に少しお時間をいただきまして、私ども立教大学ボランティアセンターの活動のことと、

本日のシンポジウムの概要についてご説明いたします。第1部では陸前高田市からお話をいただき、私も本当に深い感銘を覚えました。やや上から目線のように恐縮なのですが、私どもは「支援する側」、陸前高田市は「支援される側」です。しかし、市長のお話を聞いていて私を感じたことは、実は支援する私たちが、支援される側に励まされ、多くのものをいただいているということです。そういう意味では、ボランティア活動とは、単純にする側、される側という上から下への流れでは決してなくて、ともに考えて歩いていくということ。その原点を戸羽市長のお話からいただいたように感じました。私ども立教大学として、陸前高田をはじめとする被災地の復興支援に取り組んだことが、本当に間違いのないことだった。そしてこれからも継続していかなければいけないことだという思いを新たにいたしました。ボランティアセンター設立 10 周年を迎えるにふさわしいお話を賜り、感謝しております。

当ボランティアセンターはおかげさまで設立 10 周年を迎えました。確かにセンターとしては 10 年目ではありますが、その前に既にチャブレン室を中心としたおよそ 20 年の活動の歴史があり、さらに遡れば、ポール・ラッシュ博士が関東大震災の後の復興のために来日し、本学着任後に BSA を組織されました。それを考えれば、1 世紀以上の

歴史を持っております。恐らくポール・ラッシュ博士が活躍したころには、ボランティアという言葉すら意識せず、事実として、当たり前のこととしての活動があったのだらうと思っております。そうして1世紀を築いて、今日があるわけでございます。

10年はひとつの節目であると同時に、これから未来に向けてのスタート地点でもあります。日本にある大学の中で、ボランティアセンターを設置しているところは残念ながらまだ少数です。そういった意味では、本学のボランティアセンターの歩みはまだ短いながらも、その先陣を切る役割を持っていると考えています。

この先、私たちは何をどう発信すべきか。私どもの議論の中で2つのトピックがありました。

ひとつは、「ボランティア」というのは、今ある現実をどう受けとめ、どう立ち向かうのかが原点だろうということです。それには、観念論や抽象で語るのではなく、まず現実に向き合い、真摯に考えてみるのが大事ではないかということです。ふたつ目は、「実践」です。ボランティアは取り組むこと、まさに実践です。その形態には、もちろん本日、これから話しいただくシンポジストのように、実際に現地に行って活動するものもあります。あるいは、行けないけれども募金しようといった取り組みがあります。あるいは、市長もおっしゃったように、何とかしてあげたいという気持ちを持つことも一歩につながるかもしれません。

私たちは、いま一度、現実と実践からボランティア活動を考えていきたい。それにはまず、私たちが実際に現実をどう受け止め、どういう歩みをしているのか。ここから議論を始めようということにしました。きょうはこれから実際に現地で活動した学生2人、現地と学生を取り次いだコーディネーター、現地で私どもを迎え入れていただきました陸前高田市社会福祉協議会の皆さんにそれぞれの体験をご自身の言葉で語っていただきます。

**根岸** 社会学部4年の根岸えまと申します。東京都生まれ東京都育ちの都会っ子ですが、好きな

食べ物は、干しイモと、イカのふいりという気仙沼の郷土料理です。

私は、2012年の4月から2013年の3月まで、1年間大学を休学して気仙沼市の唐桑町でボランティア活動していました。本日は活動の内容はもちろんですが、どういう経緯で休学に至ったか。休学を終えて、復学して、4年次を迎えるにあたっての気持ちの変化についてお話しできればと思います。よろしく申し上げます。

私が最初に被災地を訪ねたのは、2011年8月でした。正直に言えば、震災直後は何かしたほうがいいのかという程度の気持ちで、いろいろな学生たちが大勢現地へ行っているというのは分かっていたんですが、行くきっかけもないし、右も左も分からなかったのも、特に積極的に動こうとはしませんでした。そんなときに大学のボランティアプログラムを知り、これなら安心していけるのではないかという気持ちで参加しました。東北とはいえ、8月はすごく暑かったです。主に海岸で石灰の材料になるカキの殻とがれきを分ける作業に従事したのですが、腐ったカキのにおいがすごく臭くて息苦しいほどでした。

夜になると、<sup>おいで</sup>生田地区の方々がバーベキューをしてくださって、学生たちと地元の生田地区の方々との交流会を行いました。私はそのとき初めて地元の方々、東北の方々とお話しをするので、すごく緊張していたんですが、みんなすごく気さくに話してくださって、とても和やかな場だったのを今でも覚えています。日中はワークをしたり、夜は毎晩、みんなで輪になって、被災地に初めて来てどう思ったかというような話を2時間近くしたり、内容の濃いプログラムだったと思います。

滞在期間は5日間でした。帰りのバスが出るときに、菅野征一郎さんが窓から手を振ってくださるんですね。「またおいでね」と言われて、私はごく自然に、また来ますねと言ってしまっていました。だから、東京に戻ってきた後も、「また来ます」と言ったからには行かなければ、という思いはどこかにずっとひっかかっていました。

その一方で、別の場所でも活動してみたいと

いう気持ちもありました。そこで、日本財団の学生ボランティアセンターが気仙沼市唐桑町に学生を派遣するプログラムに参加してみました。唐桑というのは気仙沼市内から車で20分ぐらい離れたところにあります。いろいろな大学の学生たちが15人から20人ぐらい、5日間、がれき撤去をするというボランティアです。まだ外部の人間が泊まれるような宿泊施設ではなく、民家をお借りして、そこでみんなで自炊をしつつ5日間過ごしました。

活動を終えて東京に戻った翌日、私は友達と東京タワーに行きました。そのとき、東京タワーにもすごく違和感を覚えたんです。被災地はあんなに何も無い状態で、陸前高田などはまちが消えてしまったし、戦後の日本はこんな感じだったのかもしれないと衝撃を受けた次の日には、東京はネオンがキラキラと光っているのを目の当たりにするわけです。そのギャップについていけない自分がいました。とにかく現地に行かなければ、行ってみたい、またあの人に会いたいという思いが自分の中でどんどん強まってきて、今度は個人的に、2011年の秋休み、立教大学の夏季ボランティアのプログラムで知り合った仲間と一緒にレンタカーを借りて陸前高田へ行きました。このときにもまた、征一郎さんにもお世話になりました。お会いするのは2回目ですが、とても懐かしくて。自分の中で陸前高田というところが、被災地というよりも、ひとつの町になってきていて、被災者という顔の見えない存在だった人たちが、どんどん見えてくるようになって、ひとりひとりの顔がどんどん思い浮かぶようになりました。

本当に毎週末のように金曜日に夜行バスで行って、月曜日の夜行バスで帰ってくるというような生活をしていました。地元の人との距離がどんどん近くなってきて、知り合いも大勢増えていきました。その一方で、入り込み過ぎて現地のニーズが分からなくなったこともありました。がれき撤去も2011年の冬には終わっていて、クリスマスにはちょっとしたイベントも行ったのですが、そのような催しも本当に必要とされているのか。支援って何だ

ろう、ボランティアって何だろう、自分たち学生ができることって何だろうと、とても悩んだ時期でもありました。

それでも、行けば「お帰り」と待っていてくれる人が地元にはいて、それに対して「ただいま」と帰る自分がいて、「お帰り」と「ただいま」の関係ができ上がってる中で、地元の人たちも少しずつ前を向き始めるのが分かるんですね。そうやって歩み始めた人たちのそばで、自分ももっとこの復興の過程と一緒に見ていきたい。何よりも支援とは一体何なのか、仮設住宅では毎週末のようにイベントを行っているけれども、そんなものは震災前ではなくて、逆に疲れるんだよねという声を実際に仮設にお住まいの方から聞いたりして、ここで求められていることは何なのだろうというのをもっと知りたくなりました。

それを知るためにはどうすればいいのかと自分で考えたところ、地元の人たちと同じ目線に立ち、同じ生活をして初めて見えてくるものがあるだろうと思い始めました。特に気仙沼は漁師町なので、海とともに生きる生活だとか、古くから伝わる文化や伝統、地元の人たち同士のつながりが私の中ではすごく新鮮でした。東京では隣の家の人の顔すらも分からない状態で生きていたので、地域コミュニティなんて感覚として理解できませんでした。ある意味、カルチャーショックも感じました。何かここにはすごく面白いものがあるんじゃないかと考え始め、親からはものすごく反対されましたが、それを押し切り、2012年4月から休学して、現地に住んで活動を始めました。

まず、2011年5月に「からくわ丸」という団体を立ち上げました。「支援」というのはやめて、「協働」という形にしましょう。自分たちの町にあげがない、これがないとか、若い人たちが出ていくのはしょうがない、仕事がないという「愚痴」を「自治」に変えていこう。ボランティア活動をまちづくり活動に変えていこうというような考え方に基づいています。

具体的に何を行ったかという、現地には、Uターンだったり、そもそもずっと住んでいる20代、

30代の若い人たちが15人ぐらいいるんですね。そのメンバーと、これからの唐桑について話をし、地元の若い人たちがもっと意見を言える場をつくらうということになり、月に1回、ルーキーズサミットという会合を開いていました。時には地元のちょっと年配の方々を呼んで、昔の唐桑について話をしてもらったりもしました。今にして思えば、本当に何でも屋さんでした。畑づくり、仮設住宅でのお月見とかお花見に呼ばれて踊りを踊らされたり、地元の夏祭りのお手伝いをしたり。呼ばれればどこへでも行き、何でもしていました。

長期滞在する中で強く感じたことが3つあります。まず、やはり地元の人との信頼関係はものすごく育まれました。例えば、支援してくれている人たちにはなかなか言えないような本音も、「えまちゃんにだったら言えるから」と打ち明けてくれたり、あちこちのイベントによく顔を出していたので、いつでも来てねというので仲よくなってということも多かったんですけれども、強いきずなを持たなかったことが、私の中で大きかったです。

2つ目は、コンビニに行けば絶対、知り合いに会ってしまうほどコミュニティが狭いので、悪い噂も良い噂もすぐ町中に伝わってしまうんですね。逆に言うと、こちら地域の良い面も悪い面も把握することができたように感じました。これは定期的に通っている時には分からなかったことです。

3つ目は、被災地というのは、学生ボランティアにとっては非日常的な空間だと思ったことです。それが1年間生活をすることによって日常的空間になる。その結果、地元の人目線になって一緒に考えることができるようになり、地元の人がいなかったら何もできない自分に気がついたり、きれいごとばかりでは何でもうまく回るわけではないという現実の厳しさを知ることができました。

今、1年間を振り返って、行っておいてよかったなと思ったのが、地元のおばちゃんたちが開いている地場産品のお店、「唐桑夕市」と出会えたことです。週に1回、夕市と言っているけど、昼1時に始まって14時には終わってしまうんですが、そ

の夕市に1年間毎週通って、おばちゃんたちが持ってくる箱を運んだり、会計をしたりというお手伝いをしていました。家庭菜園レベルの野菜を持ち込む人もいれば、リンゴ農家の方、お盆のときには菊の花をつくってくるおばあちゃんがいたり、様々

です。私は東京に住んでいて野菜を食べるときに、それをつくっている人の顔というのが思い浮かんだことは一度もありませんでした。夕市が終わって売れ残ったものが出ると、私たちは5人で共同生活をしていたのですが、キャベツ3玉、白菜4玉もらっても食べきれないと言っても、たくさんくれるんですね。でも、私は作っている人たちの顔を全部知っているから、大事にするし、おいしく食べたいと思うんです。

今まで、野菜にしても魚にしても、生産者の顔が見えない消費者が、自分でした。東京にいる自分たち消費者にも、もっと生産者の顔が見えたらいいのに。そうしたら、野菜だって、肉だって、魚だって、みんなもっと大切に食べるし、無駄にしたりしないだろうなと感じました。

もう一つは、夕市は野菜を売ることはそれほど重要ではないんです。集まってくるおばちゃんにしてみれば、週に1回、仲のいい10人ぐらいが集まって、ああでもないこうでもない、世間話をしたりするのがみんなすごく好きなんです。たまには外に出て、みんなでお茶っこをしながら、本当に11時から14時まで、3時間ずっとしゃべっているんですね。私が口を挟むすぎがないくらい、方言がずっと飛び交っています。この時間をすごく楽しみにして、生きがいになっているおばあちゃんたちと話しているときに、ある方がボソッと言いました。「この夕市会は、もう10年後は無いからね」と。この場所が本当に好きで、ここに来ては、自分たちの野菜を誇らしげに、あまりできがよくないときは安くするし、できが良いときは、自信を持って高く売る。そんな素敵な場所なのに、10年後に無くなるってどういうことだろうと思いました。

よく聞いてみれば、「もう後継者もいないし、これから大型スーパーがどんどんできたりして、安い

野菜なんて幾らでもある。だから、こんなところは10年後にはもう誰も必要としないんだよね」と言われたときには大変なショックでした。そこで初めて第一次産業の衰退という状況を身をもって感じたんです。身近な、こんなに生き生きとしている人たちが苦悩している。地域の課題がすごく浮き彫りになって、まして知り合いのおばあちゃんたちの課題になったときに、私の中でも自分ごとになっていました。少子高齢化が進む中、仕事もなく、第一次産業も衰退してきているというような地方で生活していると、その問題が、よそ者の自分でも1年間いることによって、自分ごとになったというのが1年間暮らして一番感じたことでした。

休学する前は、社会学部の講義の中でそういった地方が抱える問題の話がされても、へえ、そうなんだとしか思えなかったような自分が、「ああ、あのおばあちゃんたちの問題なんだ」ととらえるようになってから、聞いている授業が全然違うものを感じました。この意識の変化が、自分の中では学生として変わったところだなとは思っています。

後輩からは、学生ボランティアだからこそできることって何ですか、何をすればいいんでしょうかとよく聞かれます。私は別に学生だからどうこうではなくて、自分たちのしたいことをすればいいと思っています。まず自分の強みとは何だというのをそれぞれが自覚した上で活動してもらいたいです。私は、自分たちは「よそのもの」だし、その地域にとっては「わかもの」だし、「ばかもの」にもなれるようなところが強みだと思っていました。「よそのもの」の視点を活かして、地元の「わかい」人たちと一緒に「ばか」になれる。そんな学生が、これから私の団体でももっと生まれてくれればいいなと期待しています。

今は主に自分の経験に基づいた情報発信をしています。たとえば、陸前高田の立教大学のボランティアの拠点「炭の家」に立教生が来たときにお話をさせていただいたり、唐桑のPR活動をしたり、あとは学生ネットワークの構築です。今、東北で活動している学生団体は20団体ほどありますが、今後は一緒に課題を共有して解決策を見

いだしていこうという会を持ち始めました。今後も続けていけたらいいなと思っています。

今後ですが、私は地元の人たちと一緒に前を向いて、一歩ずつ、ゆっくりでもいいから進んでいきたいと思っています。自分たちの強みは、地元知っている人がいて、一緒に活動する仲間がいることだと思っているので、そうやって地元の人たちと一緒に前を向いて活動していけたらなと思っています。あとは、やっぱり大学に復学したので、もう少し大学の勉強にも腰を据えて取り組んでいきたいと考えています。

最後になりましたけれども、このような1年間の活動をさせていただいたのも、ポール・ラッシュ博士記念奨学金のおかげだと思っておりまして、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。また本日は、ご清聴どうもありがとうございました。

**浅見** コミュニティ福祉学部福祉学科3年の浅見由希乃と申します。

私からは、「つながる環境が持つ力」というテーマで、私自身が感じたことや考えたことなどをお話させていただきます。

まず、お手元にあるレジュメに沿って、私が所属している学生支援局 Three-S を紹介いたします。Three-S というのは2011年6月7日、震災のおよそ2カ月後に発足した団体です。名前の意味は、「Support Station by Student」の3つの頭文字のSを取って、学生による支援局だったとか、あとは「Support Station for Student」にすると、学生のための支援局ということで、学生が主体になって活動を進めていくという意味の団体になっています。

Three-S が活動の軸に置いているのは2点あります。ひとつは、学生が持っている何かをしたいという気持ちを実現していくことで、活動は多岐にわたっています。例えば、新宿区の都営アパートに避難されている広域避難者の方と、その都営アパートにもともと住んでいらっしゃる方が交流を図れるようなサロンを開いたり、石巻茶色い焼

きそばアカデミーという、石巻のソウルフードである石巻焼きそばを世に広めていこうと活動している団体の方とつながりがありまして、関東近県で販売活動をするときにお手伝いとして参加しています。

また、2012年12月には「手のうたチャリティーコンサート」を開催しました。Three-Sの学生と、手話歌、手話でメロディーを表現して、多くの方に歌を届ける活動をしている団体にも所属している学生が、コラボレーションして何か活動ができないかなということでも生まれた企画です。

さらに2013年9月まで4回行った「ZeRoバスツアー」は、ぜひこれから震災復興に関する活動をしていきたいとか、まずは自分の目で被災地を見て自分の足で立ってみたいという学生たちと一緒に現地を回るという活動です。ツアーの企画から日程調整、バス会社の選定やツアーのコース組み立ても、すべて学生だけで企画運営しました。

ふたつ目は、Three-Sとして、学生が感じたことや経験したことを外に発信して、より多くの人に震災のことを伝えたり、思い出すきっかけを提供することで、皆さんに被災地への関心を持ち続けてもらおうという活動です。例えば、立教大学の新座キャンパスの学園祭では、3年連続で石巻焼きそばを販売して、学生や来てくださった地域の方にそのおいしさを広めたり、学生が現地で撮ってきた写真にコメントを添えて写真展を開いたり、少しでも多くの人に現地の今の状況を知ってもらえるような活動をしています。

現地へ行った学生に被災の体験を語ってくださる地元の皆さんが口をそろえておっしゃるのは、「ぜひ帰ったら、家族や友人、まわりの人に震災のこと、被災地の話を伝えてほしい」というです。さらに自分たちから聞いた話を、これからの人生に活かしてほしいということなんですね。今後はそのような機会も積極的に設けていきたいと考えています。

Three-Sという団体として活動することの利点は、体験や思いを共有しやすいということです。

活動をしていく中で、こんなこともしてみたいなというひらめきや思いつきがあったときに、団体であれば個人よりは実行に移しやすいことが多いと思います。そして、よくも悪くも、いっぱいいっぱいになって気持ちの整理がつかないときや、何かに行き詰まったときなど、同じくらいの目線で話のできる存在が身近にいる頼もしさというのが強みなのではないかと考えています。

私たちの活動の何よりの支えになっているのは、集まれる場所があるということです。コミュニティ福祉学部には復興支援推進室という組織があります。支援室は現地派遣にかかる費用の助成などをしていただいたり、学生と密に連携を取っているところです。その復興支援推進室の一角をお借りして、Three-Sの活動拠点とさせてもらっています。好きなときにいつでも来られる場所ということで、学部も学年もばらばら、参加している活動とか、経験とか、感じ方というの、それぞれ違った学生の集いの場になっています。Three-Sの活動はもちろんですが、普通に授業の空き時間だからといって課題をする学生がいたり、お昼ご飯を食べる学生もいたり、学生生活の日常風景みたいになってもあります。その日常の中で、ふと震災だったり、活動の話題が、すごく自然な流れで出てくるなというのは感じています。ここにいると、特別に意識しなくても、震災について自然に考えることができるのかなと思っています。

支援室に来るきっかけも人それぞれです。興味があって来ましたとか、友達についてきましたとか、あとは出身が東北なのでとか、親戚がいるので何かしたいとか、本当にさまざまな理由なんですね。私もそうでしたが、やっぱり最初に来たときは、どうすればそういった気持ちを形にできるのかが分からないんです。メンバーと一緒に何となく過ごしているうちに、したいことだったり、続けたい理由だったりというのを、自分の中に少しずつ見つけていける。そんな場所であると感じています。

集まる人が多くなればなるほど、価値観や関わり方にもバリエーションが出てきます。そのためすぐもどかしい思いをしたり、壁にぶつかることも少

なくはありません。まず Three-S の雰囲気として、ひとりひとりの自主性を尊重し、自由度が高いというのがすごく強みであると同時に、その中で団体としてのまとまりをどう維持するか、負担が偏ったりというところをどう解消するかという難しさに直面することもあります。そういった何かしらの課題に当たったときに、どうすれば乗り越えていけるかという工夫も少しずつ体得してきているかなと思っっています。

私の考える Three-S のこれからですが、学生生活には4年という区切りがあります。それゆえに引き継ぎというものは避けられません。私たちの学年も2013年11月末に2年生に引き継ぎ、第一線を退いたところなのですが、面白いなと思ったのは、学年ごとに色があって、得意とすることとか、アプローチの仕方も様々あって、団体としても少しずつ変化をしていることです。被災地の現状も時間の流れと共に変化をしていきます。そんな中でも、あ、ここは Three-S だなとか、Three-Sらしいなと感じさせる何かはずっと受け継がれているなということを感じています。

それと、活動していく中で、成果よりも満足が大切にできたらいいなと考えています。Three-S が取り組んでいる活動は、成果が分かりやすく目に見える形であられるものばかりではありません。むしろ見えにくいもののほうが多いかもしれません。そこにたどり着くまでに、どういうことがあって、どこが大変だったとか、こういうことがあって踏ん張れたという体験のひとつひとつ今後の力になるのだと思います。人にうまく伝えるのが難しいんですけども、関わってきた人だけが、過程を知っている人だけが感じられる価値があるのではないかと思います。その価値を Three-S の団体として肯定することができたら素敵だなと思いますし、そうならば、これからも生き活きた団体で居続けられるのではないのでしょうか。

私が震災復興ボランティアに初めて関わったのは、2012年2月に気仙沼大島で行われた現地プログラムへの参加でした。震災が起こったのはちょうど入学した年で、正直なところ、まずは大学

に慣れるのに精いっぱいという状態でした。当時、同じサークルに所属していた先輩が Three-S に入っていて、気仙沼大島での現地プログラムを紹介するメールをもらいました。何かしたいなという気持ちは強くあって、きっかけを待ち続けていたので、ぜひこの機会にということで参加を決めました。それを皮切りにして Three-S にも入り、2カ月後の4月に、もう一度気仙沼大島に行くことになります。

二度目の気仙沼大島では、行きの新幹線の中で、自分がもう一度行くと決めた理由をずっと考えていました。もちろん何かしたいという思いはある。ただ、それだけではなくて、この時はそれははっきりと認識できなかったというか、何となく認めたくないという思いがありましたが、私が今まで活動を続けてきているのは、現地に行くと、すごくたくさんものもらって帰って来るからなのだと思います。それは思い出だったり、気持ちだったり、形に残らないものが多いのですが、では、私からできることは何だろう、また会いたいな、感謝の気持ちを伝えたいなという思いでまた行って、さらにまたたくさんもらって帰ってきてというのをずっと繰り返しているうちに、気づいたら自分の中で大切な一部になっていったなと思います。

活動を始めた頃の頃は、それこそ本当に知らないことばかりでしたので、自分にできることは何だろうとひたすら模索していた時期がありました。4月に新宿区の都営アパートに避難されている広域避難者支援のサロン活動に参加したり、夏休み中は NPO の現地プログラムに参加して、岩手県で1週間ほど、全国から集まった大学生と、初対面同士で班を組んで仮設住宅でサロン活動をしたり、とにかく色々なものにどんどん積極的に参加して、経験を重ねようと思った時期がありました。そういった中でたくさんの人と出会い、初めての体験や気づきをたくさん積み重ねる過程で、少しずつ自分の中に、できること、したいことが形づくられていったように思います。それと同時に、あれもこれも手を出していたのですが、時間には限りがありますし、100%を活動に割けるわけでも

ありません。自分の限界を知り、取捨選択に迷ったときも、話を聞いてくれたり、こういう見方があるんじゃないと助言をくれて支えになったのは、Three-S のメンバーや活動を通して出会った人たちでした。私にとってかけがえのない財産です。

活動で印象に残っている場面ですが、私が一番多く参加しているのが気仙沼大島での活動です。2013年12月後半にもクリスマス会を企画しています。こういった催しは今回で16回目になります。続けてきたからこそ見えてきたことがたくさんあります。例えば、最初は学習支援ということで、子どもたち主な対象として展開していたのですが、そこからどんどん広がって、小学校、地域というところにつながっていきました。今では島を歩いていると、「立教大学の学生さんかな」というのでよく声かけてもらいます。子どもたちが、「次はいつ来るの」と言ってくれることが何よりも嬉しいですし、また来ようという気持ちにさせられます。

また、「三歳広場」という幼児を対象とした場では、去年、今年は夏祭りを開催しました。去年は学生が主導で行っている感じが強くて、地域の方にはあくまでお手伝いしてもらっているという状況でしたが、こじしは地元の方もお店を出してくれたり、準備に積極的に顔を出してくださったりと、関わりが強くなったなど実感しました。

春休みや夏休み、活動とは別の機会にお世話になった人たちに会いに行ったこともありますが、そのときも、地元で出会った方に観光名所の大船渡の穴通磯というところに連れていってもらったり、つい先月のことですが、仮設住宅にお住まいの方で、ちょうど旦那さんもお孫さんもお出かけになられて、一人で夜を過ごさなければならぬときに「ちょっと不安なので泊まりませんか」とお誘いをいただき、一緒に布団を並べて夜を過ごすといった体験もさせていただきました。

活動をとおして、私自身のボランティア観は変化しました。それまでは一般的なイメージと同様、ボランティアは良いことであり、誰かのためにしてあげることだけれども、ちょっとハードルが高いか

な、自分とは違う、すごい人がするものだというイメージでした。大学のプログラムに参加した際、引率の先生が、私たちは行ってお世話になる立場でもあるということ、自分ができることをすることが、現地の方の能力を引き出すことにつながるんだよと言ってくださったり、現地の方からは、ずっと一方的にしてもらいっ放しというのが、どれだけ居心地が悪く、つらい気持ちになったかという言葉聞き、肩の力が抜けたこともありました。先に述べたような一般的なイメージのままでは、ここまで深い関わりを持った活動はできていなかったでしょう。「する」、「される」という一方向的な関係ではなく、お互いが自分にできることをするだけ、そう考えられるようになれば、ボランティアに対するハードルは低くなるのかなと感じています。

今後については、Three-S と関わりつつ、復興支援を5年、10年というスパンでずっと見ていきたいと考えています。また、個人的にも、今まで築いてきた関係をこれからもずっとつなげていきたいと考えています。この復興支援に関わったことで、私自身も将来の目標というのができました。そういった意味でも、大変実りの多い活動に携わることができました。支えてくれた仲間と現地の皆さんに、あらためて感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

**平野** 根岸さん、浅見さん、ありがとうございました。

ここまでは学生たちに取り組みの実践を発表してもらいました。次に、これを支援する私どもボランティアセンターの役割について、中村ボランティアコーディネーターから話をさせていただきます。

**中村** 立教大学ボランティアセンター、ボランティアコーディネーターの中村です。先ほどの陸前高田の戸羽市長のお話にもありましたとおり、先日2013年12月4日で東日本大震災から1000日という日にちがたちました。ここ最近、全国の大学ボランティアセンターなどから、復興支援に関す

るシンポジウムなどのイベントのご案内を立教大学にもいただいております。各大学が、震災後の社会の中でどのような役割を果たしていくのかを見直し、団体や大学の枠を超えて、ともに検討していく時期にあるのだということを感じています。

本日のキーワードである、「高等教育機関としての大学」という視点から、本学の陸前高田支援ボランティアの取り組みを考える際に、「リベラルアーツ教育」という1つの軸に寄って立つことができると思います。それは学生生活を通じて、社会を科学的に理解する力、自分とは異なる多様な他者とともに生きることを大切にできる、自立した自己を育てる教育だと考えています。

そのリベラルアーツ教育に通じる本学のボランティアプログラムの実践を行う中で、私には問い続けてきたことが4つあります。ひとつ目は、震災による被災地域が広くある中で、なぜ立教は陸前高田を支援するのかということです。二つ目は、NPO や企業による復興支援ボランティアツアーが多くある中で、なぜ大学のプログラムとして行うのかということ。三つ目は、大学生のボランティア活動になぜコーディネーターが要るのかということ。最後に、大学になぜボランティアセンターがあるのかという根本的な問いです。ボランティア活動を支えることは、本学の、大学としての本来の役割とどのような関係があるのかということについて考えてみたいと思います。一見どれも基本的な問いなのですが、陸前高田ボランティアの実践を通じて、こうした問いに対してどのように模索してきたのか。この場でお伝えすることによって、大学ボランティアセンターの役割をいま一度皆さんとともに考えていくことができれば幸いです。

まずひとつ目についてです。震災による被災地域が広くある中で、立教はなぜ陸前高田を支援しているのか。これは、立教の復興支援活動の理念が、建学の精神と切り離すことができない点が挙げられるかと思えます。その1つは、キリスト教に基づく人間教育として、おのおのが置かれた立ち場を超えて、お互いに尊重し合う人間的交流と成熟を目指すものとして成るということです。

二つ目は、そうした人間教育のフィールドとして、立教は 1980 年代からさまざまな特徴を持つ地域社会と関わる中で、学生が共生について考える立教キャンプを行ってきた伝統があります。歴史の歩みの中では、沖縄のハンセン病療養所や、フィリピンの少数民族コミュニティをフィールドした活動を行ってまいりました。現在では、山形県高畠町の有機米生産組合や、岩手県奥中山にある福祉施設などでフィールドの活動を行っております。こうした社会フィールドでの活動を、大学全体として継続してきた歴史の中に、震災復興支援の活動が受け継がれていることがプログラムの特徴としてあると思います。

陸前高田では 2003 年から学生部による林業体験のフィールドプログラムとして、地域の人たちに守られてきた伝統や文化に学生たちが直接接触し、交流を行うことが継続されてきました。震災後の被災した地域でボランティア活動を行うにも、宿泊所など、拠点を持つことが困難な状況が続いていましたが、私たちはこの林業体験で関わってきた生出地区というところに合宿の拠点を持つことを受け入れていただき、また、地域の方々から震災直後のお話を聞かせていただいたり、多くの学生たちにとって、いつまでも心に残る交流をさせていただいています。このような関わりの中で、立教大学にとっての震災復興支援は、いつきの支援ではなく、これまでの陸前高田地域の方々との交流の蓄積、つながりの深化、そして学生の学びの場としての関係を大切に築いていくことに位置づけています。

こうした理念と多様な支援活動を具体化していくために、2012 年5月には、大学全体として、今後さらに陸前高田市の復興と地域活性化のための人材教育を行っていくための包括協定の締結を行いました。この協定締結によって、改めて陸前高田と立教の関係においては、学生が陸前高田地域全体と出会い、そこに生きる人たちへ思いを寄せて、ともに生きることを大切にしていく姿勢であることを明確にしました。

次に、なぜ大学としてボランティアプログラムを

行うのかという、2つ目の問いについてお話しします。ボランティアを通じた青少年教育は、大学以外の団体において専門的に取り組まれてきた歴史があると思うのですが、今日それを大学で取り組むことの意義は何であるのか。陸前高田での活動は、2011年から今年の秋まで、継続的にがれきの撤去や草刈り、漁業の支援、子どもの支援、地域整備などを行い、そのときどきの地域のニーズに応えてきました。2011年には災害ボランティアセンターを通じた活動を行い、2012年は小友町おともの新田にいた地区の自治会を中心とした活動、こしは災害ボランティアセンターに変わって、県外からのボランティアと地元のニーズをマッチングしている、復興サポートステーションというところの活動を行いました。今年になってからは、初めてご遺体捜索が行われているエリアでの活動にも参加し、まだまだボランティアの力が求められている場面があることを痛感した次第です。支援活動として、ボランティアに行くだけでなく、現地に入る前に事前研修を行うことによって、地域や災害ボランティアセンターの理解を深め、ボランティアから帰った後も、学生生活につなげていくために事後の研修を行い、キャンパスの内と外を超えて、震災に一人一人が向き合っていくプログラムをつくってまいりました。

津波によって被災した建物の取り壊しが進み、土地の整備とともに、現地に立っても被災が見えにくくなり、学生ができる活動も限定されてきました。その中でどのようなプログラムを行うことが、立教らしい活動を続けていくことになるのかを考え続けました。2013年3月、震災から2年たった陸前高田を訪れた際に、そこで私が強く感じたのは、個々人の歩みと復興という言葉の意味が非常に多様であることでした。考えてみれば当然のことなのですが、人々の生活が皆それぞれ違ってあるわけで、復興支援に行くという部分的なところのみ目を向けたプログラムに、私自身がどこかとらわれていたことに気がつきました。そこから表立った被災の部分の主眼とした活動を行うことを目的とするのではなくて、学生が陸前高

田の「今」に身を置く中で、人々の痛みと希望を感じ、決して一言では語ることはできない「復興」を、自分の問題に引きつけて、関心を持って行動していくことにつなげることが、大学のプログラムとして行うべきことなのではないかと考えました。

こしの活動では、「陸前高田の震災復興の歩みに学ぶ」ということをテーマにし、ボランティアに行く学生が震災復興に向かう個人と社会にある多様性に目を向け、防災に向き合い、コミュニティの形成や存続と歩む仲間として、みずからの行動につなげていくプログラムを試みてきました。復興支援ボランティアは4泊5日で行いますが、その間、地元の新聞記者の方、地域医療を行うお医者さん、建設業者の方、また市役所の職員の方々などをゲストスピーカーとしてお招きし、さまざまな視点から社会を支え、復興を考えている方々のお話を伺いました。そうした機会の中で、学生たちが将来の職業や生き方を考えることにつなげていくことができました。

現地での活動を生かすためにも、ボランティア後の取り組みに力を入れ、学生が復興に関わるさまざまな論点について深めたことを授業内で発表するという機会をつくり、自分たちが現地から持ち帰ったことを伝えていきたいということ、同じ学生に向けて発信する試みを行いました。自分の考えを他者に伝える言葉にまとめる作業は、体験のリフレクションとして重要であったと思っています。こうした事後の取り組みを行うことに積極的に参加した学生たちの多くは、その作業や準備の中でディスカッションをし、学部や学科、学年を超えた交わりの中から、学生同士が新たな刺激を受けたと話してくれました。現地の活動のみで終わらせない、大学に持ち帰って広げていくこと。それはまさしく2011年の活動以来、陸前高田の方々から私たちに向けられた、震災を忘れないで、伝えてほしいということに、学生たち一人一人が本気で向き合うことでした。大学での取り組みを通じて、より多くの学生と学びを共有していくことが、大学のプログラムの独自性につながるのでは

ないかと今、考えています。

最後に3つ目の、私がコーディネーターとして現場に立つ中で感じてきた難しさや、経験から考えてきたことについてお話ししたいと思います。学生のボランティアプログラムを行う上で、なぜコーディネーターが要るのかということです。まず、遠隔地域にあるフィールドとのコミュニケーションを行っていくことの大切さがあります。地域のニーズに応える活動を行っていきたいという思いがあっても、東京にいて現地の日常に触れ続けることがかなわない中で、実際に日々の移り変わりを感じたり、支援活動の動きを知ったりすることはとても難しいことでした。そんな中で、林業体験からつながりのある生田地区や、2011年の活動以来、継続的に関わっている小友町とのつながりや、何気ない会話によるコミュニケーションを続けていくことが、活動を動かしていく上で非常に重要であることに気づかされました。また、大学のプログラムとして行うためには事前に様々なことを確定していくことが求められている一方で、何かと流動的な地域の状況に対して臨機応変に応えるといったことがスムーズにできなかった点はいなめませんでした。大学と地域の調整役として、両方の事情の擦り合わせを行っていくことが、より求められていることを実感しました。

次に、ボランティアに参加した学生のさまざまな変化に、コーディネーターとしてどう応え、学生を導くのかという点です。被災地のことを知りたくてボランティアに参加したのに、実際に現地に行ったら、見た目では被災が分からない、被災があったことがぴんとこないという学生たちの率直な思いが私によく向けられます。そうして被災が見えにくくなっている状況や、その背景にあることを具体的に伝えていくことが、学生たちの関心をつなげるために求められていると感じています。これには、もともとの町を知る地域の人による市街地の案内をしていただいたことにより、地域の人たちの町の思いに触れ、新しい建物が建つことが必ずしも復興とは言えないという複雑さを理解する大切さを教えていただきました。多くの学生にとって、

被災地ボランティアのイメージとは、被災の跡が見えやすい現場で活動し、自分が役に立っている実感を得ることの期待がどこかあると思いますが、私たちが実際に陸前高田の活動を行ったことは、昨年からそうしたイメージとは別のことも多かったもので、学生たちの中には、思い描いてきたボランティアとのギャップから、もやもやした気持ちになったり、ボランティアとは何か、という議論が現地の中で必ずと言っていいほど発生しました。

現地では毎晩、振り返りとして皆で話す時間を持っていましたが、そこでの話し合いの中で、自分とは違う意見に触れたり、自分の中では分からないことをメンバーと一緒に見つめ直し、支援とは何かを一人一人が改めて考えていくことによって、固定したボランティアのイメージから、より広い活動への理解につながることができました。

また、プログラムでは、日ごろ学生と関わりのない大学職員が引率者となり、話し合いのファシリテーションや、一緒に活動を行うことを通じて、学生の感性や想像力から刺激を受け、単に活動を管理する引率者の関わりから、学生の成長を促す積極的な関わりに変化していったことが見られたことは、大変大きな気づきでした。

こうしたことから、コーディネーターが中心となってプログラムを引っ張るのではなく、よりよいプログラムになるために、さまざまな役割を担う人たちを、そのときどきに生み出していくことの大切さを実感しました。

また学生同士の話し合いでは、被災した地域や人々への同情に終始しがちなのですが、コーディネーターが関わることによって、それを社会的課題という視点に広げることが可能になっていくと考えています。事前学習の段階から、話し合いに参加することの楽しさや充実感を学生が実感することによって、仲間への信頼感を生み、仲間のために自分が貢献できることを提案するような様子も見えました。コーディネーターの存在によって、学生や職員の多様な可能性を結びつけ、潜在したものを引き出していくことがプログラムの展開で可

能になっていくことが分かりました。

最後に、なぜ大学にボランティアセンターがあるのかということ問い直してみたいと思います。その中で、震災後の社会で私たちが果たす役割、そしてボランティアプログラムを行うことについて考えてみました。陸前高田のボランティアプログラムを通じて被災した地域と関わり、復興とは何かを考えること。そこから見えるさまざまな課題について考えることは、決して自分たちの生活と遠いところの話ではないことを学生たちは学びました。そして学生である自分が今後何を学び、どうすることでそれらの問題を解決していく1人になれるのかということを考えました。そうしたことを一緒にアプローチしていくための機会づくりや橋渡しをしていくこと、また新たなフィールドにつないでいくことこそが、大学教育として今後担っていくことだと思えます。

大学ボランティアセンターは、学生と教職員が集まり、社会と関わり、向き合って、時に自らが変わっていくハブとしての重要な役割を持つことができます。そうした人々の動きを生み出すために、センターの施設内やプログラムの中に、学生の関心に響く要素を散りばめる工夫やアイデアが求められると思います。現在の立教大学ボランティアセンターの施設は、今年の春から5号館に移転しましたが、資料の閲覧スペースの工夫をはじめ、社会貢献に関わる雑誌を配置したり、学生の生き生きした活動をモニターで映したり、スタッフが学生対応しやすい配置のアイデアをスタッフ一同で出し合ってつくり上げた空間があります。

また、新しく設置された打ち合わせ室には、壁一面をホワイトボードにし、クリエイティブな話し合いを楽しめる空間を工夫して考えました。インターネットを活用した情報発信として、メールマガジンや Twitter の導入は大変有効に機能していますが、人と人が直接に出会い、交わる場を大切にすることが教育の現場として、私たちは最も力を注いでいくべきだと改めて感じています。

私はこれまでの取り組みから、ボランティアの原則のひとつである「自発性」と、その一方で、教育

の持つ意図的、組織的な取り組み、働きかけとの関係は、相反するものなのかという問いについて考え続けています。これについて明確な答えは出ていないのですが、このことは復興支援活動をはじめ、大学が社会と関わり、学生ボランティアの活動を支援していく際に考えるべき重要な点だと考えています。例えば、東日本大震災の学生ボランティアに関して、ボランティアの単位化についての議論がありました。個人の自発性に基づくボランティアと、目的や評価を伴う教育との関係についてはさまざまな見方や議論が絶えずありますが、大学は少なくとも、どのような立ち位置で学生ボランティアを支援していくのかを明確にする必要があると思っています。立教大学のリベラルアーツの軸に立ち返ったときに、やはりそれは、世の中の真理の追究と他者との共生に立ち向かう勇気を学生が様々なフィールドの経験の中から育むこと、そうした意味での自発性を支える現場の営みこそが、大学ボランティアセンターの役割なのではないかと考えています。そのような豊かな土壌の機能を果たす大学ボランティアセンターが、社会と共同して多様なプログラムを生み出していくことが、今後も震災復興、そしてその他のさまざまな社会的課題の中で求められていく役割だと考えています。

**平野** ここまでは、大学の側からの取り組みや支援という視点でお話を伺ってきましたが、ボランティア活動は当然のことながら、こちらと、受け入れていただく側、両方の共同作業で成り立っています。本日は陸前高田市社会福祉協議会事務局長の及川賢一様に来ていただいております。実は陸前高田市の社会福祉協議会自体が被災され、大変な状況だったという中にもかかわらず、ボランティアを受け入れた活動をしていただきました。受け入れていただいた陸前高田の側から、ボランティアについてのお話をいただければと思っております。

**及川** 陸前高田市社会福祉協議会の及川でござ

ざいます。このたびの東日本大震災におきましては、立教大学の皆様方には継続的なご支援をいただいておりますことに、深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。また、ボランティアセンター設立 10 周年記念、おめでとうございます。このようなシンポジウムにお招きをいただきまして、大変恐縮いたしております。ところでございますが、被災地から見た陸前高田市の復旧を支えたボランティア活動ということで、報告をさせていただきます。

陸前高田市は三陸リアス式海岸に位置しますが、もともと海岸線から山際までの距離があり、高低差が非常に少ない平坦地に市街地を形成しておりまして、私自身も大変暮らしやすい場所と感じていました。海岸線には樹齢 300 年とも言われる 7 万本のアカマツとクロマツが混在する松林がありまして、岩手県内でも屈指の海水浴場として、必ず小さいときに一度や二度は、大きくなっても内陸のほうから海水浴に訪れる地域でございます(シンポジウム配布資料 4-②参照、以下「資料 4-②」とする)。

それがこのたびの東日本大震災によりまして、あったはずの街並みがすっかり消えてしまいました。先人からバトンタッチして育ててきた 7 万本の松も、たった 1 本を残して全て流されてしまったところでございます(資料 4-③)。この津波によって被害を受けた場所は、このピンクで囲ってある場所になります(資料 4-④)。当然、このような大きな津波の来襲を想像しておりませんでした。私ども市民にとっては、山間部と言われる地域まで、今回被災したところでございます。高台から高田松原を見て、津波を記録した写真がございますので、紹介をさせていただきたいと思っております(資料 4-⑤,⑥,⑦)。

こちらが広田湾というところで、高田町の市街地はここにあります(資料 4-④)。陸前高田市は明治 29 年、昭和 8 年、昭和 35 年と、近年 3 回の大津波の被害を受けているところでございます。市では、昭和 35 年のチリ地震規模の津波が来ても対応できるように、高さ 5.5 メートルの防潮堤を市

内海岸全域に張り巡らせて、一応の防御を図った生活をしていたところでございますが、今回の津波はとてつもなく大きく、その 5.5 メートルの防潮堤をはるかに越えて市街地に押し寄せてきたというのが実態です。どんどん、どんどん津波にのまれて、うちが消えていき、最終的には町並みはすっかり海面の下に沈んでしまいました。

市役所の庁舎も甚大な被害を受け、そこに避難しておりました市民や市の職員が大勢犠牲となりました。私ども社会福祉協議会の事務所として使っておりました市の福祉関連施設周辺も、このように鉄筋コンクリートが残るだけで、木造家屋についてはことごとくがれきとなってしまいました(資料 4-⑧)。

震災時には 24,246 人の市民がおりました。9 月 31 日の行政の発表では 20,600 人という数字で、既に 3,646 人も少なくなっているところでございます。この東日本大震災によりまして亡くなられた方が 1,556 人、それからいまだ家族のもとに帰れない、行方が分からない方が 215 人というところでございます。世帯数では、8,198 世帯のうち、54%にあたる 4,465 世帯が被災してしまいました。半数以上が被害を受けた計算です。今現在は、7,549 世帯ということで、649 世帯減っています(資料 4-⑩)。

私ども社会福祉協議会では、被災直後からさまざまな支援活動をさせていただいておりますが、本日はその中で、災害ボランティアセンターを通して行った支援活動について報告をさせていただきます。

まず活動の経過ですが、2011 年 3 月 17 日に市の対策本部を設置した学校給食センター内に、私ども社会福祉協議会の災害ボランティアセンターを開設いたしました。その中では、主に体育館や公民館等の公共施設に避難している被災者への炊き出し支援ボランティアの募集、幼児の遊び相手のボランティア。体育館に避難しておりますと、高齢者の方々は、一時的に隔離しなければならない状況が出ましたので、その宅老所の運営スタッフのボランティア等の受け入れと派遣を

行いました。

4月23日には、市内で唯一被災しなかった横田町に災害ボランティアセンターを移しました。それまでは、被災者の方々への直接支援を行っていましたが、この4月23日からは、被災地の復旧支援ボランティアの受け入れと派遣業務にかじを切り替えました(資料4-⑪)。

被災者からの依頼を受け、そこにボランティアの方々を派遣して支援活動を行うというコンセプトです。具体的な活動内容としては、がれきの撤去、重機でがれきを取った後でも小さな石やガラス破片が残りましたので、農地を再生するため、手作業での撤去を行いました。田畑の草刈りや、塩水をかぶったために立ち枯れ状態になった木々の伐採、側溝に詰まった泥出しのボランティア。それから、被災したものの修理すれば何とか住めるという家屋もありましたから、被災者の要望にお応えして、床板や壁をはがして泥を出し、がれきの運搬したり、あるいは引っ越しの手伝い、ここに書き切れないほどの本当にさまざまな部分で、被災者からの依頼に対して、全国から支援していただきましたボランティアの方々にご支援をいただいたところでございます(資料4-⑫)。

被災者がボランティアを受け入れするまでの経過ですが、実は私ども社会福祉協議会では、この東日本大震災の検証をまだ十分に行えていない状況にあります。私も2011年の7月の14日からことしの3月14日まで、仮設住宅の暮らしをしておりましたので、どちらかというとそちらのほうの地域の気持ちが出てしまうコメントになることをお許しいただきたいと思います。

まずひとつは、被災地域には長年育んでまいりました「<sup>根</sup>結」の気持ち根強くあったのではないかと考えております。自分たちのことは自分たちでやるんだという気持ちが強くあったように感じています。現に町内会で協力し合いながら、犠牲になった方々の遺体の捜索もいたしました。家財道具の搬出、使えるような建物の洗浄作業など、さまざま協力して、実際に行動を起こしておりました。

多くのボランティアから支援をいただけるとは、

実は思っておりませんでした。ただただ、毎日、毎日、とにかく朝に集まって、きょうはどこの共同作業をするということの連続で、頭がそちらのほうに向いておりましたので、ボランティアの方にお願いをするにも、どのような対応をすればいいのか、戸惑いがございました。例えば、電気や水などのライフラインが閉ざされている中で、ボランティアに来ていただいた皆さんに対してお茶も出せない。休憩時間に何を出したらいいんだろうと、大変悩みの多い被災当初でございました。

このような中で、私ども社会福祉協議会としてはどのように対応したらいいのかと考えました。最初は災害ボランティアセンターのほうで電話の受付業務に重きを置いていましたが、その後は、被災者宅や避難所などを回って、ボランティアの受け入れに関するチラシの配布をしながら、ニーズ調査とボランティア派遣の周知を図っていったところでございます。これに関しましては、私ども社会福祉協議会は職員がほとんどいない状況ですので、市の民生委員、児童委員の方々、各県の社会福祉協議会から派遣された職員の皆様、それから、いち早く駆けつけてくださったNPO等の支援団体のご協力を得まして、徐々に浸透してまいりました。やはり1地区で、誰か一人先頭を切ってボランティアを頼んでいただけると、目の当たりにして見るわけですから、どんどん、どんどん、輪になって広がっていくのが目に見えるように分かりました(資料4-⑬)。

被災地の復旧作業につきましては、まず最初に自衛隊、警察官によるがれきの撤去をしながら遺体の捜索活動が行なわれました。その作業が終わってから、ボランティアの皆様ががれきの撤去等のご支援をいただいたところでございます。最初は行政のほうで重機によるがれきの撤去を行っていましたが、どうしても重機が入れない場所がありまして、ここについてはボランティアの方々が大変大きな力をいただきました(資料4-⑭,⑮,⑯,⑰)。

2011年の冬場になりますと、がれきはほぼ見えなくなってきましたが、秋ごろからは草刈の依

頼件数が多くなってきて、やはりボランティアの方々にご協力をいただいたというところがございます(資料4-⑱)。

被災から1年を過ぎたあたりで、被災者の方々も全員それぞれ仮設住宅に収まりまして、これからの生活の再建などを考え始める段階になりました。春先になって、少しでも体を動かして畑を耕したいという声が聞かれるようになりました。野菜を植えて、気を紛らわしたいという方が多くありましたけれども、畑に行きますと、小さな石やガラスの破片があって、とても畑の耕作などできない状況が続いておりましたので、支援団体から急きよ、ふるいをご寄付いただきまして、来る日も来る日も土をふるいにかけて、ガラス破片を取り除く作業が続いたところがございます(資料4-⑲)。

2011年の頃から、漁業者も養殖施設の再建に向けて動き始めました。これに関しまして、いかだづくりなどには大勢のボランティアの方々に携わっていただき、復旧が早くできたのかなと感謝いたしているところがございます(資料4-⑳)。

ボランティアさんの皆さんが果たした役割に関してです。まだまだボランティアの方は必要でございますけれども、私ども社会福祉協議会の災害ボランティアセンターは、平成24年12月23日に「ボランティアセンター」と名称を変更しましたが、今現在もなお被災に対する支援を続けているところがございます。その23日までのボランティアの活動実績といたしましては、被災者からの依頼件数が6,781件ございました。全国各地から集まっていただきましたボランティアの皆様方の人数は12万9,469人でございます。私ども陸前高田市民は、千年に一度と言われます東日本大震災によって、これ以上ない挫折と絶望を味わっておりましたし、今まで一緒に働いていた仲間や大切な家族を一瞬のうちに失ってしまったことで、やはり誰よりも命の大切さとはかなさを知らされたところがございます。そのような中で、立教大学はじめ、全国から寄せられましたたくさんの支援を通しまして、私ども陸前高田市民は、人の優しさと思いやりを知らされましたし、触れさせて

いただいているところでございます(資料4-㉑、㉒)。

多くのボランティアの皆様のご支援をいただく中で、まずひとつ感じるのは、被災者個々の復旧作業が予想以上に加速したことです。ボランティアの方との関わりが何よりも大きな心の支えになっていたからだろうと思います。被災から既に2年と8カ月、もう少しで9カ月になろうとしていますが、今現在は仮設住宅、それからアパート等のみなし仮設住宅、在宅被災者の方々の心のケアの生活支援が主となっている時期でございます。陸前高田市内を見渡しても、物理的な支援が必要な場所は本当に少なくなってきております(資料4-㉓、㉔)。そのような中で、立教大学におかれましては、その関わり方が、がれき撤去といった単なる作業ではなく、今まで培ってきた交流から、ボランティアを超えた協働の意識に変わっていったことが、我々被災者にとりまして大変ありがたいことでございます。決して派手な活動ではありませんが、私ども被災者は、寄り添っていつまでも見守っていただいているというところに大きな安心感を覚えています。それがいまだに心の大きな支えとなっておりますので、どうかこれからも、可能な限りご支援をいただければありがたいなと思っているところがございます。

復興が進むにつれ、被災者一人一人の心境は多様化しております。こんなときこそ不安な気持ちを抱かれる方も多かろうと、行政では「復興News 陸前高田」という冊子を逐次出しております。被災者、市民の方々に、市では今このようなことをしております。また近々実施予定の事業計画を周知しながら、復興計画に基づいたまちづくりを進めているところがございます(資料4-㉕)。

長年、震災前に毎年行っておりました七夕祭りですが、ことしの夏には高田町内の動く七夕が、全町内会で復活いたしました。私ども市民といたしましても、何よりの復興の証しということで、大変喜んでいたところがございます。

皆様方には「奇跡の一本松」と呼ばれておりますが、7万本のうち残ったたった1本の松は、樹

脂加工されまして、復興のシンボルとなりました。私ども大変励まされた一本松でございますから、今後とも大切に保存しながら扱っていきたいと思っていますところでございます(資料 4-⑳,㉑,㉒)。

結びになりますけれども、先ほど戸羽市長も言われたとおり、復興に向けた各種大型プロジェクトが既に動き出しております。私ども社会福祉協議会といたしましても、今後継続的な支援体制をつくりながら、支援をしてまいり所存しております。震災の記憶が次第に風化しつつある今現在ですが、皆様方、どうかこれからも陸前高田市を忘れないでください。機会がありましたら、日々復興に向けて歩んでいる陸前高田市にぜひおいでください。世界に誇れるような美しいまちになるまでには相当の年月がかかると思いますが、陸前高田市民は丸となってそれを目指して頑張りたいと思いますので、今後ともご支援賜りますようよろしくお願いを申し上げまして、私からの報告とさせていただきます。本当にありがとうございました。

**平野** 及川様、ありがとうございました。

4人の方からお話しいただきましたが、大きく分けると3つほどのテーマに絞れるかと思えます。1点目は、被災地支援をどう考えていくのかという問題。2点目は、ボランティア活動とは一体どういうものなのかということ。そして3点目は、大学のボランティア支援とはどういうものなのかということ。この3点について、根岸さん、浅見さん、中村さんからひと言ずついただければと思います。

**根岸** 私が皆さんのお話を聞いていて思ったのは、個人的な意見かもしれませんが、ボランティアというのは、ギブスみたいになってしまっはよくないのではないかとことです。骨折をするとギブスをしますが、骨がくっついた後もずっと付けていては筋肉が弱ってしまいます。最終的にはその地域にもともと住んでいる人たちが前を向いて歩き出すための、ちょっとした支えのような存在の「よその」で居続けたいなと改めて思いました。

**浅見** 私がここまで活動を続けてこられたのは、自分自身だけの力ではなくて、私の話を聞いてくださったりと、いろいろなところで気づきをくださった人たちのおかげというところが強いです。ボランティアをする側も、手応えのようなものがないと気持ちの部分で続けていけなかったり、どこかで苦しい部分が出てきてしまうと、それがプラスには働かないところもあるので、チームや団体として思いを分かち合い、みんなで活動に取り組んでいくことは、とても大事なことだなと思いました。

**中村** ちょうどお話しした大学のボランティア活動ということと絡んでくるのですが、平野先生のレジュメにセツルメントの歴史が書いてありますが(本文 p.9)、このことを強く思います。今回の資料編「ボランティアセンターの歴史」にも、1923年、関東大震災のところからボランティアの歴史が始まっていますが、学生のボランティアというのが、まさに関東大震災の際に学生たちが動き出し、その後に発展した経緯があります。その経緯としては、「知の分与」、「大学を拡張し社会に開いていく」、そして「社会の調査をもって社会に貢献していく」という点が日本の学生ボランティア、そしてボランティアそのものの原点ということになります。これは今日のボランティア、大学におけるボランティア活動についても非常に通じていることなのではないかなと思っています。

当時は大学生が少なかったですが、現在は大学がこれだけ多く、ユニバーサル化している中で、そして大学ボランティアセンターという大きな資源がある以上、こうした学生の活動、大学による活動というのは、もっと社会を変える大きな力になっていく可能性を十分持っているのではないかと考えています。

**平野** ありがとうございました。会場の皆様から、たくさんのご意見やご質問が寄せられております。時間の許す限り、お答えしていきたいと思いません。

**及川** それでは私のほうから、「寄り添う支援」ということで、地元の方々との顔が繋がっている部分が必要不可欠なのでしょうか。つながりを持たない者、いわゆる「よその」ボランティアにはできることの限界があるのでしょうか、というご質問でございます。

これにつきましては、今、被災者がどのような気持ちで暮らしているか、その辺を感じ取っていただきながら、交流していただければありがたいなと思っております。例えば、立教大学のほうも、最初は単に被災地の復旧支援活動のボランティアとして参加をしていただいたのではないかな、と思っております。それが回数を重ねるにしたがって、地域とのつながり、顔なじみが出て、それから交流を続けながら、いまだに支援をいただいているという関係になっているわけです。ボランティアから同じ仲間、同志的な感じでのお付き合いは、これからもまだまだ広がるのではないかと感じております。いまだに立教大学さんがいらっしゃるときには、いつ来られるのか、町内会のニュースとしてすぐに流れます。それだけ町内会の方々とのつながりを持ちながら活動をしていただいているんだなということで、被災者にとっては安心感につながるホットなニュースとして、ありがたく感じております。

今の時期にはがれきの撤去といったハード面でのボランティアの要望はほとんどございません。あったとしても数件ですので、毎日来ていただければ毎日どこかのボランティアをお願いできる時期は過ぎております。そこで2012年12月23日以降は、市民ボランティアの方々を募集して、今、十数名の登録がありますが、高齢者の方が引越したいとか、視聴覚に障害のある方の草刈りを手伝っていただきたいという要望があった場合は、その都度、市民のボランティアの方々からご都合のよろしい人をお願いして、ハード面でのボランティアを行っていただいております。今年度におきましても数件でございました。それだけ少なくなっている状況です。

一方、私ども社会福祉協議会では、生活支援

相談員を国の補助事業で採用しておりまして、こちらのほうで、仮設住宅ごとに定期的にサロンやお茶飲み会を開いております。これには被災者のニーズに応えながら、手先を動かしたいといえ、手芸のできるボランティア団体と連携してサロンを開いたり、運動不足だと言われれば、レジャーのところのボランティアの方々との連携をさせていただいて、簡単な運動のできる場を設けたりと、まだまだボランティアの方々のご支援をいただいているところです。ただ、このような形で少しずつ、ボランティアの支援の内容が変わってきているということだけはご理解をいただければありがたいなと思っております。

**中村** リベラルアーツ教育に通じるボランティアプログラムは授業としての科目化(単位化)が可能かどうかについての考えをお聞きたい、ということです。私の考えなのですが、可能か不可能かということに関しては、サービスラーニングの導入ですとかカリキュラムの改編に伴って、現実的に可能になっていくと思います。ただ、そこでポイントとなってくるのは目的です。ボランティアセンターが今行っていること、あえてそれを単位化、科目化していくこととは何が違うのか。目的がどういうふうに変っていくのか、という点を、それぞれの大学またはプログラムの中で明確にしていく必要があると思います。そうでなければ、大学で言えば、大正時代から築かれた学生ボランティアが、歴史の中で一体どういう意味をなしてきたのかということのないがしろになってしまうことになりかねません。そういった意味でも、単位化していくこと目的というのをより明確にしていくことが必要かと思えます。

**浅見** 私がいただいた質問は、ボランティアに積極的に取り組んで得た学びを、卒業後の社会生活、仕事、暮らしともに、長い人生の中でどのように生かしてみたいと考えていますか、ということですが。東北というのは地縁とか、地域のつながり、独特のつながりというものがすごく強いところだと

思います。その地域のつながりがあったからこそ震災が起きても乗り越えてこられた部分や、逆に、震災でコミュニティがばらばらになったことで出てきた課題があるということも学びました。やはり日ごろから顔の見える関係や、いざというときに助け合えるつながりをつくるということがすごく大事になってくるのではないか感じました。私は今ちょうど3年次生です。この12月から就活が始まりました。今、福祉学科で地域福祉領域を専攻していますが、この活動がきっかけで地域福祉に興味がわいてきました。今後の自分の進路選択を考えたときに、地域で、できれば現場に関われる仕事がしたいと強く思うようになっていきます。

**根岸** 私は活動を通して、現地にとって、そこに暮らす地域の人たちにとって果たせた役割が何であったと考えていますか、という質問をいただきました。とても印象的なエピソードをひとつ紹介させていただきます。地元の若い人たち、20代、30代の人たちが、今は毎晩のように、震災直後、避難していたプレハブに、みんな仕事帰りに集まって、今度はこういう企画をしようといった話しているんですね。高齢者の方々向けの支援はたくさんあったり、自治会でも高齢者の方が多くて、意見を言う場はたくさんあります。子どもにも教育支援や放課後支援など、手厚いケアはあるのですが、復興の中心になるべき20代、30代のところはすごく薄いなと思っていて、20代の自分たちは、そこにアプローチをかけていこうと思っていたんです。

そのときに地元の20代の人たちから言われたのが、東京からわざわざ自分たちの町のために、こんなにたくさんの学生が来てくれている。自分たちが町のことを何も考えずに、自分たちより5歳も10歳も若い子たちが活動しているのに、自分たちが何もしないのは違和感があるということでした。その時ときにははっと思いました。私たちができた役割は、若者、つまり自分と同じか、少し上の年齢ぐらいの人たちとモチベーションというか、気づきをひとつ、シェアすることができたのかな、

そういう役割を果たせたのかなと考えています。

**平野** まだまだたくさんのご質問がありまして、本当はひとつひとつお答えしたいところですが、残念ながら時間となってしまいました。ここで本日のコメンテーターとして、立教大学東日本大震災復興支援本部副本部長である本学副総長の西田邦昭からひと言述べさせていただきます。

**西田** 西田でございます。本日は4人の皆様方、本当にありがとうございました。

お話を伺っていて、参加した学生たちの気持ち、具体的な活動、それをコーディネートしてきた中村さんの考え、それを受け入れてくださった及川さんをはじめとする地元の方々の思いを伺うことができました。最初に戸羽市長に行政の長としてのお考えを伺って、立教大学の東日本大震災復興支援の活動を多面的にとらえていただいていることに、復興支援本部副本部長として、とても感謝いたしております。また、本日参加していらっしゃる方々の中には、ボランティアセンターと一緒にプログラムを作っていたいただいている方々もおいでになりますし、学生を受け入れてくださっている地域、あるいは施設の方々、また、他大学のボランティアセンターの方など、非常に多様な方々が本日よりしゃっています。本学のボランティアセンターの活動に多くの方々にご理解とご支援を頂戴していることに改めて感謝申し上げます。

皆さんの話を聞きながら、2011年3月11日のこと、そこからこれまでの2年9カ月のことを思い出していました。ちょうど3月11日は、私はこの建物の2階におりました。ひどい揺れで、びっくりしてすぐテレビをつけたところ、しばらくして東北地方を襲う津波の映像を見ました。立教大学は、震災当日4,000名を超える帰宅困難の方々を受け入れました。大学内の施設も一部損傷したこともあり、卒業式、入学式は取りやめ、授業開始も1ヶ月遅らせ5月からにしました。このような状況の中で、学生たちから、被災地に行き自分たちのできることをしたい、大学のほうで活動先を用意して

くれないかというような声がずっと届いていました。

一方で、コミュニティ福祉学部では復興支援室を立ち上げられて、これからどういう地域で活動していくかということ、先生方が手分けして探していかれるというお話を伺いました。私たち復興支援本部としてできることは何だろうということを考え、夏休みに林業体験でずっとお世話になってきた岩手県陸前高田市が壊滅的な被害を受けていらっしゃいましたので、夏休みに学生によるボランティアを企画することにしました。ちょうどその頃、6月から7月にかけて、私どもの卒業生が東北にも随分いらっしゃいますので、被災された卒業生を訪ねさせていただきました。北は八戸から、ずっと下りまして、田老だとか山田町だとか、宮古、釜石、そして石巻も行きましたし、東松島、仙台、名取のほうもずっと回りました。その時に率直に感じましたのは、夏休みにボランティア活動を行うことは決めてはいましたけども、本当に大丈夫だろうかということでした。私は戦争を体験しておりませんが、恐らく大空襲時の東京は、こういう状況だったろうなという様子を目にしましたし、夏はものすごく暑いということは分かっていました。精神的、肉体的に学生は耐えられるだろうか、本当に大学が責任を持って学生を送り出せるのかと随分、自問自答した記憶があります。

ただ、その中で、やはり今、日本の中で起きているこのことを、学生がその現場に立ち自分の目で見、自分の耳で聞く機会を提供する、これこそ大学の役割だろうという思いに至りました。以前から林業体験でお世話になっていた陸前高田市の生出地区にお伺いして、本日も越しになっています菅野征一郎さんをはじめとした方々に、是非学生によるボランティア活動をさせてくださいとお願い申し上げました。生出地区の方々は快く引き受けてくださいました。そんな準備をしながら、2011年の夏を迎えたわけです。

正直に申し上げますと、夏、学生たちが毎週4泊5日でボランティアに行くことについて、私はずっと不安な気持ちでおりました。現地に行ってみるのが自分にとっては一番安心でしたので、毎

週行っていましたし、週に2回行ったこともあります。夏の全活動が終わったときに、戸羽市長のところにご挨拶に行きました。そのときに、私は陸前高田に行く前には、住民のおよそ10人に1人の方々が亡くなられまた行方不明になられていたので、みなさん悲しみにくれ下を向いて暮らしていらっしゃるのではないかなと想像していたので、すけれども、スーパーなどで買い物していると、笑顔で声をかけてくださるんですね。「けがしないくださいね、ありがとうございます、頑張ってください」と。そんなことを戸羽市長にお話ししたら、戸羽市長のほうから次のような言葉が返ってきました。「皆さんは、東北人は粘り強い、根気強いとおっしゃいます。昼間、皆さんと会っているときには笑っているけれども、夜ひとりになったら泣いています。自分たちがここまで何とか頑張ってきたのは、多くの皆さんに励まし、寄り添ってもらえたからです。これからきっと報道も少なくなるでしょうし、私たちへの関心もどんどん薄くなっていくでしょう。そうしたら私たちは頑張れません。何とか立教大学には、細々とでもいいので息の長いご支援をお願いしたい」。

私はその言葉に後押しをされてここまで来たと思っています。いわゆるがれき撤去のボランティアというのは、ある時期から薄れたわけですが、支援のあり方は多様です。野球部による野球教室、バレーボール部によるバレー教室といったスポーツを通じた支援、あるいは図書館の整備など、さまざまな活動を展開してきました。それはそのとき、そのときに、実際に現地に行き、いろいろな人たちに出会い、いろいろな話を聞いている中で、今必要なのはこんなことなのかと情報を集めながら、プログラムをつくってまいりました。それがどれほど有効であったか分かりませんが、何よりも感じることは、若い学生たちが行くとおじいちゃんやおばあちゃん、子どもたちも本当に喜んでくれる。学生はオールマイティで元気を与えられる。これだけは確かなことだなと感じています。ですから、これからも、十分なことはできないかもしれませんが、学生が現地に行くための

仕組みを作り、コミュニティ福祉学部や社会学部などの学部での取り組みも含め息長く交流を続けていきたいと考えています。

ご質問の中に、活動に関わる交通費についての質問がありました。「学生さんが毎週、毎月のように訪問していることに感心しました。行くにはお金がかかると思うのですが、その部分についてはどうされていますか」という内容です。

立教大学では、復興支援活動を始めるに当たって、学生への援助金の制度を用意いたしました。初回行く学生には交通費の2分の1、そして2回目以降は4分の3を支援していく。宿泊については、上限の規定をつくりまして、それで学生たちに援助しています。その財源は、2008年の11月にスタートさせました「立教未来計画募金」に寄せられた寄付金です。この募金は5年間で50億円の募金を集めることを目的としておりますが、そこから、学生たちにかかる費用については捻出しております。卒業生の方を中心にして、多くの方々から、学生が現地に行くための費用、あるいは被災して大学進学が経済的に困難になった学生たちの学費等の減免、あるいは奨学金として使ってくださいというようなことで頂戴いたしております。

最初の出会いは、大学、あるいは学部が用意したプログラムかもしれませんが、その後学生たちは自由に羽ばたいていきます。それぞれの活動に期待して、今後も広がりを持っていければなと思っています。どうもありがとうございました。

**平野** 大変長い時間、皆様方、本当にご苦労さまでございました。おかげさまで大変実り豊かなシンポジウムにさせていただきました。本当にありがとうございました。

最後のまとめでございますけれども、もうまとめるまでもなくて、本当にそれぞれのご発言からたくさんのお話を私たちは学ばせていただきました。強いて言うのであれば、よくボランティア活動といいますが、善意の押し売りであるという言い方をされず。あるいは、自己満足であると大変揶揄される

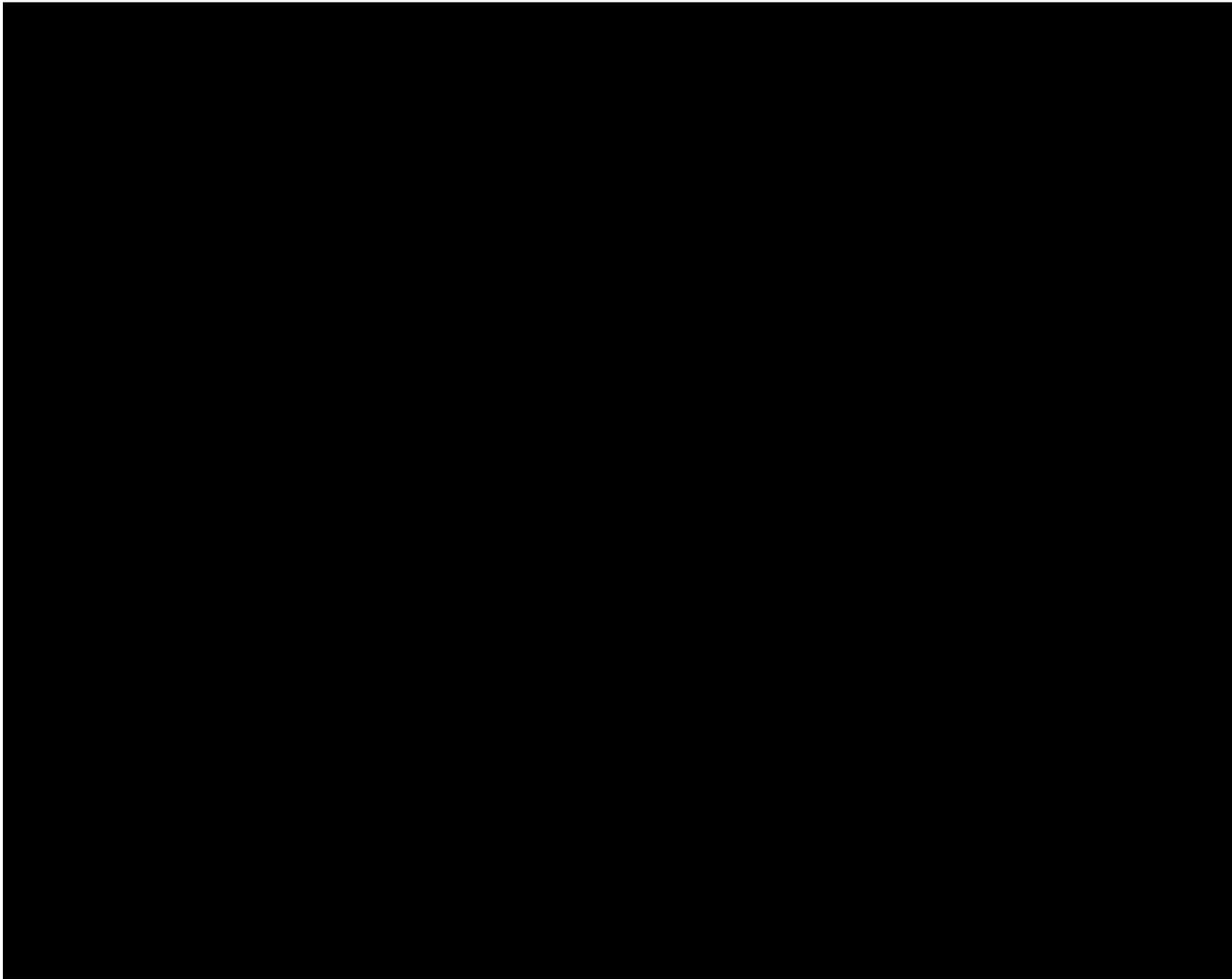
こともしばしばです。現にそう思っている方もいますけれども、きょう私が皆さん方、4人の方々、そして最後のコメントの発言も聞いて思ったことは、確かにそう見られているかもしれないけれども、やっぱりそこに参加したひとりひとりの気持ち、心を考えていくと、決してそんなことはない、もっと純粋なものがある。そのことは確信を持っていいと思います。

そしてもうひとつ、「変化」ということがキーワードになると思っています。つまり参加することによって確実に変わっている。それは参加した学生ひとりひとり、関わった地域も変わっている。大きく言えば、それを通じて大学が変わる、あるいは社会が変わる、そういう変化の兆しをここから読み取れるのではないのでしょうか。私たちボランティアセンターの役割や機能、コーディネーターの役割は、その変化を起こす触媒なのではないかということを変えて認識させていただきました。

このボランティアセンター設立10周年記念シンポジウムが、これまでの10周年に感謝するとともに、これからの10年を考える大きな材料になったと思っております。ボランティア活動のもうひとつのキーワードは、「つながり」ということだと思います。そういった意味では、本日多くの方々に来ていただきました。これまで私どもの関わりを持った皆様方、そのつながりを改めて、ここで感謝する次第でございます。

もうひとつのつながりは「時間のつながり」でございます。ここまで来られたのも、諸先輩方の歩みがあってのことです。この時間のつながりにも、また私たちは感謝申し上げたいと思っております。ぜひこれから、そのつながりを生かしながら、私どもを励まし、またご指導いただきまして、立教大学ボランティアセンターの活動にご協力願えればと思っております。

最後になりますけれども、貴重な発言をいただきました4人のシンポジスト、コメントーターに感謝を申し上げまして、結びの言葉とさせていただきます。どうも本日はありがとうございました。



シンポジウム  
配布資料

## 現地長期滞在から見たもの

社会学部社会学科  
4年 根岸えま

1. 自己紹介
2. 活動と気持ちの変化
3. 学生ボランティアだからこそ
4. 今後について

### —自己紹介—

根岸えま

所属：社会学部4年（2012年度 1年間休学）

からくわ丸 学生部隊代表

出身：東京都荒川区生まれ、文京区育ち

好きな食べ物：干し芋・イカのふいり

ハマっていること：干し柿づくり



### —活動と気持ちの変化—

2011年 3月11日	2011年 8月	2012年 4月～	2013年 4月～
----------------	-------------	--------------	--------------

震災発生 ←————→ 初ボランティア ←————→ 大学休学 ←————→ 大学復学 →

- ・震災ボランティア・・・？
- ・「被災地・被災者」が「ひとつのまち・〇〇さん」に
- ・「おかえり」と「ただいま」
- ・長期滞在するということ
- ・身近な人が苦悩している地域の課題
- ・日本の地方は課題先進地
- ・「よそもの」「わかもの」「ばかもの」
- ・地元と一緒に一歩ずつ

## “つながる”環境が生み出す力 ～私の復興支援活動～

コミュニティ福祉学部福祉学科

3年 浅見由希乃

### 1、学生支援局 Three-S

- ・団体紹介
- ・“団体”であることの意味
- ・これから

### 2、個人の視点から

- ・始めたきっかけ、続けている理由
- ・印象に残る場面

### 3、体験から学ぶこと

- ・ボランティア観の変容
- ・将来への展望
- ・おわりに

## リベラルアーツ教育に通じるボランティアプログラム

### - 陸前高田支援の取り組みから -

立教大学ボランティアセンター  
コーディネーター 中村みどり

- I. なぜ「立教」×「陸前高田」なのか？
  - ・ 建学の精神と陸前高田支援ボランティア
  
- II. なぜ大学のプログラムなのか？
  - ・ 「震災復興の歩みに学ぶ」
  - ・ 事前－現地での活動－事後の取り組み
  
- III. なぜコーディネーターがいるのか？
  - ・ 遠隔地域にあるフィールドとのコミュニケーション
  - ・ 期待と現実
  - ・ ダイアログを通じた学生と職員の変化
  
- IV. なぜ大学にボランティアセンターがあるのか？
  - ・ 学生が社会につながるためのデザイン